

演 題	利用者様の笑顔を引き出すために
副 題	隙間時間を活用して

フリガナ	カイゴロウジンホケンシセツ コウフアイカワケアセンター
施 設 名	介護老人保健施設 甲府相川ケアセンター
フリガナ	コマイ リカ
発表者(職名・氏名)	駒井 梨香
フリガナ	シヨクインイチドウ
共同研究者	職員一同

【はじめに】 認知症の方では夜間の不眠とともに昼寝(午睡)が増え、昼夜逆転の不規則な睡眠・覚醒リズムに陥るようになることから生活リズムを整える為に当施設の認知症棟利用者(以下、利用者)は、起床してから就寝するまでデイルームで過ごしていることが多い。日中は全体の活動でラジオ体操や口腔体操、レクリエーションを行っているが、個々の能力に見合った対応が出来ず利用者は介護職員(以下、職員)の指示のもと活動している状況が続いた。そのことが要因となり自発性、積極性の低下、日々の楽しみが少ないように感じた。職員は日常業務に追われがちではあるが少しでも現状を変えたいという思いから、業務の中でひと段落が付き次の業務までの空いた時間、「隙間時間」を意識し関わることで利用者との過ごす大切さや生活を支えていくことの重要性について改めて職員が認識したので報告する。

【取り組み方法】 11人の職員が受け持っている担当の利用者をそれぞれ1人挙げて「担当の利用者がしたいこと」「担当の利用者としてほしいこと」を利用者へ聞き取りをもとにToDoリスト活動記録を作成した。ToDoリストや活動記録は職員が必ず目にする場所に置き、担当の利用者だけではなく、他の利用者とも関わられるようにした。取り組み期間は2ヶ月とし、活動実施前後の利用者の様子を記入して比較をした。

【結果】 実施前では「傾眠的・机に伏せている」が5人、「TVを見ていることが多い」「笑顔が少ない」が2人ずつと回答が多かった。実施後では「笑顔でいる日が増えた」「表情が変わった」が7人、「活動道具を用意すると自ら行うようになった」が2人、と変化がみられた利用者もいたが、中には体調不良の為に参加出来ず変化が確認出来ない利用者もいた。職員間では「Aさんがこんなに元気に体を動かしているのは久しぶりに見た」「Bさんはこんな表情もするんだね」と話題があがるようになった。

【考察】 利用者は自宅で生活していた時と比べ、施設の生活に合わせて過ごす事が多い為、職員は常に利用者が望む生活を汲み取る事が重要である。業務に追われがちな職員が少しでも現状を変えたいという思いから隙間時間を意識して関わりをもった。そのことで利用者と一緒に楽しい事を共有したり、利用者が過ごしてきた生活をもっと理解したいという思いが利用者・職員相互に良い変化をもたらし、職員も業務中表情が柔らかくなり、利用者と一緒に楽しく活動が出来た。このことから、共に支え合いながら生活している事にも気付く事が出来たと考える。

【まとめ】 今回は一部の利用者だったが利用者も職員もいつもと違う表情や行動を見る事が出来た。今後も活動を継続し、利用者一人一人と向き合いながら、その人らしさを引き出し、生きる喜びに繋がるように支援していきたい。